



第七回

子どもの「自主性」を 育む係活動

文 | toshi
イラスト | 秋野 純子

「うちのクラスの子は、私が言わないと何もやろうとしない」。そのような声をよく耳にします。しかし、子どもは元来「やらせて、やらせて」と、何でもやりたがるもの。それなのに、なぜこういった様子になるのでしょうか。

このことに関して、私は、教師が子どもの意欲をそいでしまっていると思う時があります。つまり、子ども自身がやりたいことよりも、教師がやらせたいことを優先させた結果、子どもの意欲が減退してしまうということです。したがって、意欲的に活動する子どもを育てるためには、教師のスタンスを変えていかななくてはなりません。

今回は、「子どもの活動意欲や自主性を育てるには？」というテーマについて、子どもの自主的・主体的・自発的な行動が特にキーとなる係活動を通してみていきたいと思います。

○よい行いを見つけて、ほめよう

学級全体として積極性に欠けると感じられても、学級のみんなのためにまじめにコツコツと努力して取り組む子は必ずいます。そういう子どもを中心に、一人ひとりの子どもがやっていることをじっくりと観察し、前向きにとらえて、よいところを探します。教師は指示するよりも、まずは子どもの行動をしっかりと見取ろうとする姿勢が大事です。誰も見ていないところで黙々と活動に取り組んでいる姿や、友達に助言したり手を貸したりしている姿などをきちんと見取り、みんなの前でその行動を認めたりほめたりしてあげましょう。

係活動には、「望ましい人間関係の形成」「よりよい生活づくりへの参画」「学級の諸問題を解決しようとする態度の育成」などの観点があります。そうした観点からほめると、自主的・実践的な活動の輪がしだいに広がっていくでしょう。日々の活動の中から、教師がいかによい点を見つけ出し、上手に評価することができるかどうかにつけると思います。

○子どもに任せてみる

係活動の様子を見てみると、「もっとこうすればいいのに…」と思う時がある

子どもと動き回れる。子どもと感覚がびったり合う。

それは子どもたちにとって最大の魅力。

「さあ！その若さという武器を最大限発揮しよう」

toshi 先生から新米先生へのエールです。

< toshi 先生プロフィール >

子どもたちと存分に遊んだ新任時代。日々子どもたちの思考の筋道を大切に、授業で子どもをどう生かすかを考える一方で、学級経営や児童理解のあり方に頭を悩ませた修行時代。子ども第一の学校経営を考えてきた校長時代。35年の教員生活を経て、現在は小学校の初任者指導にあたっている。「ある退職校長の想い」「小学校初任者のホームページ」でブログを執筆中。

でしょう。しかし、そう思ったとしても、最初から教師が口をさしはさむべきではありません。基本的には、子ども自身にゆだねてみるべきです。

ただし、教師の助言を受けて自分でやり方を改善することができると感じた時や、行動してみた上で困って助言を求めてくる時は、進んでアドバイスをしてあげましょう。このような場合は、子どもの意欲や主体的な行動を損なうことはないでしょう。

○係活動を充実させるための工夫

次に、係活動のねらいが十分に達成できていない場合はどうしたらよいでしょうか。例えば、掲示係が渡されたプリントをただ貼っているだけとしたら、それは「よりよい生活づくりへの参画」とは言えません。教師は、「給食を残さず食べよう」と呼びかけるポスターなど、もっと学級みんなの生活をより充実させるための掲示物を作ってほしいという願いをもつでしょう。

しかし、そうした場合でも一方的に教えるのではなく、子ども自ら創造的に取り組もうという意識が芽生えるように仕向けたいものです。すでに手本になる活動を行っている子をほめることによって刺激を与える方法もあるでしょう。他の学級で実践されている例を紹介するのも

よいでしょう。いずれにしても、それらの活動例を聞いて実行に移すかどうかは子どもたち次第であると言えます。日ごろからこうした姿勢で臨むことで、自主性や主体性を育てていくのです。

○子ども同士で問題を解決させる

そして、子どもが意欲的に活動するようになったときの留意点にもふれたいと思います。子どもたちの「やりたい」という意欲がぶつかって、例えば「仕事を一人占めしようとした」などというトラブルになってしまいうこともあります。この場合も、子ども同士で解決するようにはたらきかけたくなります。黙って成り行きを見守り、子どもが下した判断をしっかりりと把握するようにします。

自主的な活動が行われている学級であれば、教師が黙っていても、問題点を子ども同士で指摘し合うでしょう。その結果、素直に反省したり、自分の行為を改めて協力し合うようになったりした時には、うんとほめるようにします。このようにして、学級内の問題を自分たちで解決しようとする資質を養っていきます。

○自主的で活発な係活動を

学級には、リーダーシップを発揮し学級をまとめていくことができる子、リー

ダー性は無いが指示されれば努力してやり遂げる子、一つのことに集中して真剣にやり抜く子、いろいろと手をのびすが飽きやすい子など、様々なタイプの子ともがいます。自主的に動けるようになる、それぞれが「自分らしさ」を存分に発揮するようになります。また、お互いの個性を認め合うようにもなります。どの子にも得意不得意があり、お互いの長所を認めて生かし合おうとする姿勢が出てくるのです。

さらに次の段階になると、自分の苦手を克服して、得意でないことにまで活動の幅を広げている子を見つけることができます。

自主的で活発な係活動は、子どもたちにとって、大人になって社会を生き抜く上での大きな糧になることでしょう。

